

「すみません、まだの方。」バンドゥン市内を走る乗合自動車で、助手が運賃を集めるときに決まり文句はたいがいスダ語だ。これをインドネシア語で言うのを聞いたときには、失礼ながらもなんとなく滑稽に感じた。

スダ語は、ジャワ島の西三分の一ほどの西部ジャワ州とバンテン州にはほぼ相当するスダ地方で話されている、インドネシアの一地方語である。総人口二億人を超えるインドネシアの約15%がスダ人ということは、単純計算でスダ語の話者人口が三千万人ほどになる。「隠れた大言語」と言えるかもしれない。

私自身、大学でインドネシア語を専攻することがなければスダ語と出会うことはなかっただろう。いや、インドネシア語ができれば、それだけでインドネシアのどこでも十分に通用する「パスポート」だ。が、インドネシア語をもっとよく知るためには一つくらい地方語を学んだ方がいいなと思い、前にスダ地方をレポートのテーマに選んだことで漠然とした思い入れができ、それじゃあスダ語にするかという、確固たる動機のないスタートだった。

スダ語には、日本語と共通点がいくつもある。まずは敬語体系。スダ人と話していると「スダ語には敬語があるんだよ」と御丁寧に、しかも誇らしげに教えてくれることも多いが、それはすでに承知の上。日本語にもあるわ

とmahを使いこなしている。こいつは十年バンドゥンに住んでいても、まだ使えないのに」とお褒め(?)に与った。なんのことはない、日本語にも同じ働きをする言い方があるのだから。むしろ便利で助かっているほどだ。

勿論そんなにおいしいことばかりではない。むしろ訳の分からないことだらけだ。例えばスダ語には-arという接中辞がある。budak「子供」につくとbarudak「子供達」になり、bobo「ねんねする」はbaroboとなって「ねんねする」のが二人以上いることを表す。複数であることを示すが、名詞にも他の語にも現れる。しかも-arがつくと全く別の語にしか思えない。Ka mana?「どこへ?」も、疑問詞に-arがついてKa marana?となる。かといって「生徒たち」はmurid-muridでmaruridにはならない

20

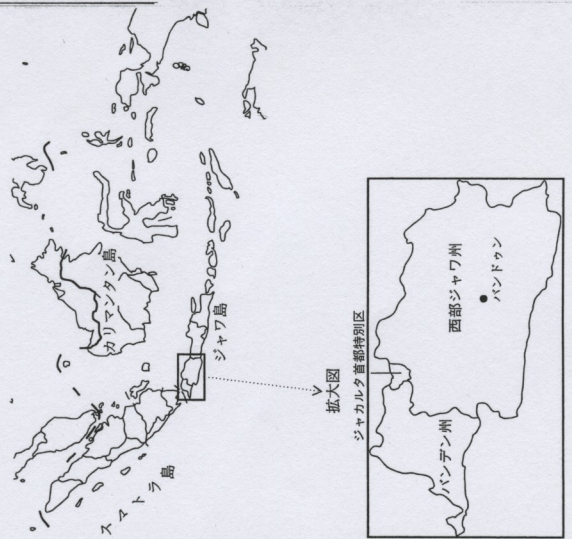
## ことばというパスポート

……(リレー連載)

ふりはたまさし  
降幡正志

[Sundanese]

## スダ語



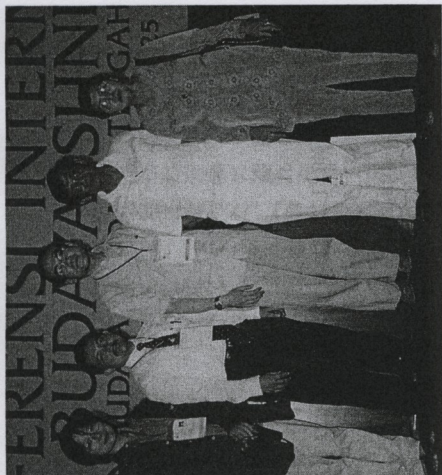
けで「食べる・頂く・召し上がる」をどう言うかと覚えていけばいいのだ。実際には覚えて使い分けるのも一苦労ではあるが。英語しか知らない人はeat一語で済むことを何故言い分けるのか悩むところから始まるのだろうか、と考えるとかわいそうにさえ思えてくる。

もう一つ。助詞の「は」に相当するtehとmahという語がある。例えば「これは何ですか?」の「は」に当たるものとしてtehを用い、「(他の人はともかく)私は知りません」と対比の意味合いを出すときにmahを用いる。留学先でお世話になった大学の事務官たちと雑談をしていると、居合わせたジャワ人の事務官をタシにして「マサシは偉い。たった一年ちよつとバンドゥンにいて、完璧にteh

らしい。Teu pararuguh!「全くはつきりしない!」……あれっ、こいつはpuguhに-arが一回も現れている!!

西部ジャワ州の州都バンドゥンはインドネシアでも五本の指に入る規模の大きな街である。都市の宿命とでもいべきか、国語のインドネシア語がずいぶん入り込んでいる。初めてバンドゥンを訪れたときには、スダ語をほとんど知らなかったこともあり、一言一言が耳に残っただけであとはインドネシア語で事が足りた。しかし留学で改めて来てみると、事前にちよつとかじったスダ語があちらこちらから聞こえてくる。バンドゥンのような大きな街でも家庭で、道端で、大学のキャンパスで、職場でと、日常生活では今もおスダ語がしつかりと息づいていて、アットホームな雰囲気醸し出してくれる。

そのバンドゥンで生活し、訳が分からないなりにスダ語が多少は身に付いてくれたおかげで、そのアットホームな雰囲気の一部をバンドゥン留学中に味わえたような気がする。もつとも、変なスダ語を口にする面白いヤツと思われていたかもしれないが、ほぼ例外なく私がスダ語を話すのを喜んでくれた。居候先の大家さん一家は私の留学目的を知っていたので、わざわざスダ語を使ってくれ、そのうちそれが当たり前になってきた。いや、言葉でのコミュニケーションだけではなく、生活そのものが当た



2001年8月「スダ文化国際会議」にて(中央が筆者)



【学習情報】

スダ語の本は、日本では森山幹弘著『スダ語会話』(大学書林、1988年)が出版されているのみです。スダ語の入門書を他に挙げるとしたら、Edmund A. Anderson, Spoken Sundanese—A Course in the Regional Language of West Java. Jakarta: Grasindo. (1996年) ぐらいでしょうか。なお三省堂『言語学大辞典』第2巻の「スダ語」の項で、言語の概略をつかむことができます。

辞書にも恵まれているとは言えません。インドネシア語ができるのであれば、いくつかが出版されているうち Budi Rahayu Tamsyah 他 Kamus Sunda-Indonesia. (『スダ語—インドネシア語辞典』1996年) と Kamus Indonesia-Sunda. (『インドネシア語—スダ語辞典』1997年) が手頃でしょう (いずれも Pustaka Setia 社刊)。あとは F.S. Eringa, Soendaas-Nederlands Woordenboek. Dordrecht: Foris Publications Holland. (『スダ語—オランダ語辞典』1984年) がありますが、残念ながら英語の辞書はまだないようです。

【日常会話】

Punteun. 「すみません」  
Mangga. 「どうぞ/どうも」  
・Punteun. は「ごめんなさい」だけでなく「失礼します」の意味でも使う幅広い表現です。一方 Mangga. は何かを勧めるとき、受け入れるとき、柔らかに断るとき、別れるときなどに幅広く使えます。面白いことに、他人を訪ねるときには「プウーウーテンウン」、それに応えるに

り前に感じられた。数年後に居候先を再び訪れたときの気分は「こんにちは」ではなく「ただいま」だった。

大学の友達も、インドネシア文学科の連中と付き合いのうも楽しかったが、それにも増してスダ文学科の連中と一緒に過ごすことも楽しかった。言葉がわからなくても肩肘張ることがなかった。そして、スダ語の個人教授を引き受けてくれた先生が若くしてこれまたすごい。お世話になるのだから謝礼を言っても、「マサンに教えることで自分も学ぶのだ」と決して受け取らなかった。

電気もガスも水道も通っていない大家さんの故郷に連れて行ってもらい、のどかな時間を贅沢に過ごし、また断食月明けのお祝い用に牛を一頭屠殺するのを目の当たりにした。スダ文学科のフィールドワーク実習に参加させてもらったときには、インタビュートしたおじさんが漢字で書いた私の名前を見て「昔来た兵隊もこんな字を書いていたなあ」と懐かしそうに言っていたのが思い出される。

居候先のチビ助の割礼のお祝いをしているとき、大音響で流した音楽に連れられて来たベルギー一家の接待をする羽目になった。「中にお入れなさいな!」「これを勧めてあげて」「どこから来たんだって?」「等々すべてスダ語でまくし立てられる。一方ベルギー人とは英語で話すしかない。なんで英語とスダ語の通訳を? まあ、通訳なん

てかつこいいのには程遠いが、とりあえずその場は事なきを得たらしいので、よしとするか。

ジャワ島の西、スマトラ島を旅行したときのこと。パレンバンという街にバンドウンの大家さんの弟が住んでいて、泊めてもらうことになった。夕食後、言われるままに一緒に行つた先は同じスダ人の友人宅。久々にスダ語会話の中に身を置いたとき、ふと「アサ・トス・ワイ・カ・ルンブル (故郷に帰ってきたみたいだ)」という言葉が思わず口をついて出た。

肌が合うというのか、水が合うというのか。いや、運が良かっただけなのだろう。とにかくいい場所に、そしていい人たちに恵まれた留学生活だった。思い出話にはきりがない。インドネシア語しか知らなければ味わえなかったであろう様々な体験ができたということは、インドネシア語とはまた別の「パスポート」も手に入ったところか。

……と、かつこいいことを書き連ねてきたが、元来の怠け症も手伝ってか、スダ語ができるというレベルに達した実感がいまだにない。しかもこのところ御無沙汰きみで、たまに本を手にとつてもすぐに壁に突き当たる。有効期限の切れないうちに「パスポート」に積もつた埃を払い落とさないと。

(東京外国語大学外国語学部/インドネシア語学)

ことばというパスポート⑩ スダ語